HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	丁仁傑著『社会脈絡中的助人行為 : 台湾仏教慈済功徳会個案研究』
Author(s)	伍, 嘉誠; 寺沢, 重法
Citation	宗教と社会貢献, 3(1), 81-88
Issue Date	2013-04
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/52329
Rights	『宗教と社会貢献』 (ISSN:2185-6869) は、創刊号より最新号まで大阪大学学術情報庫 OUKA(Osaka University Knowledge Archive) にて全文公開いたします。
Rights(URL)	http://ir.library.osaka-u.ac.jp/web/RSC/index.html
Type	journal article
File Information	rsc03_01-081.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

書評

丁仁傑著

『社会脈絡中的助人行為：台湾仏教慈済功徳会個案研究』

聯經出版社、1999 年 7 月、A5、549 頁、550 台湾元

伍　嘉誠[*]・寺沢重法[†]

1. 本書の位置づけ

台湾仏教慈済功徳会（正式名称は「財団法人中華民国仏教慈済慈善事業基金会」、以下「慈済会」）は、1966 年 4 月 14 日に証厳法師によって、台湾花蓮県で創立された仏教系の慈善団体である。当初は 30 人で結成された慈済会は、その後急速な発展を遂げ、1996 年には 7000 名の委員と 1050000 名の会員を擁するようになった。もともとは女性メンバーが多かったが、近年は男性や様々な階層のメンバーも増えつつある。慈済会は、その急激な成長と活発なボランティア活動ゆえに、多くの研究者から注目を集め、台湾における宗教と社会活動・社会参加といった観点から様々な研究が行われている。たとえば、日本では、本研究会メンバーでもある金子昭や村島健司が精力的な研究を行っており［金子 2005；村島 2012］、地域社会学者の三浦典子も関心を寄せている［三浦 2010］。台湾を含む日本国外では、宗教社会学者の Richard Madsen、政治社会学者の Hsiao Hsin-Huang Michael（蕭新煌）と David Shak が慈済会の研究を行っている［Madsen 2007 ; Hsiao and Shak 2006］。

本書は、台湾の宗教社会学者である丁仁傑（現・中央研究院民族学研究所副研究員）（以下、著者）による、慈済会の重厚なエスノグラフィーである。著者は、綿密なフィールドワークに基づいた宗教研究を得意とする台湾新進気鋭の宗教社会学者であり、慈済会以外にも台湾の新宗教や民間信仰などにかかわる著作を発表している［丁 2004、2009］。本書は、著者が、1997 年に米国ウィスコンシン大学マディソン校社会学部に提出した博士論文 *Helping Behavior in Social Contexts: A Case Study of the Tzu-Chi Association in Taiwan* をもとにまとめたものである（博士論文は著者のホームページで閲覧・ダウンロード可能である(1)）。

[*] 北海道大学大学院文学研究科・博士後期課程・ngkashing@let.hokudai.ac.jp
[†] 北海道大学大学院文学研究科・助教・shterazawa@let.hokudai.ac.jp

2. 本書の内容

以下、本書の内容を紹介する。内容の大枠をつかむために、本書の目次を紹介しよう。

まえがき
第 1 章　序論：先行研究のレビューと本研究の目的
第 2 章　方法論と研究法
第 3 章　慈済会の誕生と成長、その歴史的背景と文化的脈絡の考察
第 4 章　慈済会内「サブグループ」メンバーの基本的特徴
第 5 章　慈済会メンバーの動員、台湾における民間ネットワークの構造
第 6 章　慈済会の「集合行動フレーム」
第 7 章　慈済会における社会的相互作用および援助行動の実践に対するその影響
第 8 章　慈済会メンバーの援助行動の動機および援助行動に対する「動機描写」
第 9 章　援助行動規範の「制度化」：集団における援助行動の維持と継続
第 10 章 結論
附録 1-1　面接調査口頭承諾書
附録 1-2　調査票
附録 1-3　ボランティアと動機尺度
附録 2　　台湾社会と慈済会：慈済現象の社会分析
附録 3　文化的脈絡における「積功徳」行動：慈済会メンバーの事例研究、援助行動の越境文化研究
附録 4　現代社会における仏教組織の「制度化」および関連問題の考察：慈済会の発展を事例に
参考文献

以下、本書の内容を紹介していこう。なお、日本の宗教社会学では、台湾を含めた中国語圏の実証研究が紹介されることはあまりない。また中国語を習得している宗教社会学者もあまりいないと思われる（他の領域社会学でも事情はあまりかわらないと思われる）。そのため、本書評では内容を

やや詳しく紹介することにした。

第 1 章では、まず援助行動の先行研究の多くは実験研究であり、日常生活における実際の援助行動と大きく異なっていることを指摘する。それに対して、より自然な日常的環境で行われる描き出すために、著者は慈済会の事例研究を行うと述べている。慈済会は、(1) 組織の利他性、(2) メンバー間の活発な相互行動、(3) 組織文化規範の顕著性ゆえに恰好の調査対象であり、「ミクロ・メゾレベルから慈済会の事例研究を行うこと」で「特定文化規範と社会システムの中で、集団的援助行動はいかに発生、発展、持続するかを考察する」ことが目的であると述べている。

第 2 章では慈済会の調査方法が詳細に述べられている。調査は 1995 年 4 月～1996 年 3 月の 1 年間、「慈済台中分会」で半構造化面接と参与観察を用いて行われた。スノーボールサンプリングで抽出した 82 人（男性 39 名、女性 43 名）の慈済会メンバーを対象とした半構造面接調査が行い、また参与観察の一環として、「静思精舎」で 20 日間のボランティア活動にも参加している。なお本章には参与観察の際の様々な葛藤が生き生きと描写され、また附録には調査票も収録されているなど、具体的な調査の様子がわかるような工夫がなされている。

第 3 章では、慈済会の急成長を促した 3 つの要因が述べられている。第 1 に、民主化による宗教・集会・言論の自由、および経済発展による生活水準の向上と公共交通システムの確立である。第 2 に慈済会の理念が現代台湾に住む人々の価値観と心理的需要に適合している。経済発展に伴い、台湾の国際社会でのインパクトも高まっているが、多くの国が中華人民共和国を中国として認めているため、台湾はなかなか国際政治に参与できない。こうした抑圧された欲求が、非政治的・慈善団体への関心となって現れ、慈済会の成長を促進している。また、民主化と市場経済化は、平等・理性・合理性などの価値観を促している。慈済会の目指す「人間仏教」は、伝統的な儒教・道教・伝統仏教よりも平等志向・合理志向が強いため、新しい台湾社会の価値観に合致している。第 3 に、経済発展による 1) 消費主義・禁欲主義・市場経済の台頭、2) 都市化・社会流動の急速化、3) 共同体意識・道徳の崩壊などの問題が生じているが、こうした不安定な社会状況においてこそ宗教運動・慈善活動が道徳・価値体系を再建するものとして認識される傾向にある。そのため、儒教倫理、布施、伝統的華人社会の「積

公徳」の観念を重んじる慈済会は、台湾の政治・経済的発展のコンテクストにおいてこそ適した役割を担えるという。

第 4 章では、慈済会内の以下 4 つのサブグループについて述べている。1)「会員」: 定期的に慈済会へ寄付し、慈済会の講演会、慈善義売などの公開活動に参加する。2)「栄誉董事」(通称「栄董」): 栄誉理事。1000000 台湾元以上の寄付を収めたものがなれるため多くは社会経済的地位の高い人たちである。3)「慈誠隊」: 男性メンバーから構成される団体で、メンバーは街の交通安全活動、慈済会内での労働力の提供、慈善義売での募金活動、念仏などを行っている。4)「委員」: a)「正式委員」と b)「幕後委員」から構成される。a)「正式委員」は会員からの寄付金の回収、慈善義売、会議、念仏などを行う。b)「幕後委員」は「正式委員」のサポートを務めとし、半年以上「幕後委員」を務め、かつ「正式委員」からの推薦が得られれば「正式委員」になれる仕組みになっている。なお一人の会員は同時に 2 つ以上のサブグループに所属する場合もある。

以上の背景的知識を踏まえた上で、第 5 章以下はいよいよ本書の中心部分である。第 5 章は慈済会メンバーの動員プロセスが描かれている。まず、Stark と Bainbridge による宗教団体の成長は社会的ネットワークによって発生するという指摘を述べた上で、Snow、Zurcher、Ekland-Olson による資源動員論を用いて慈済会メンバーの動員プロセスを描き出す。まず慈済会メンバーのネットワークは、家族や近隣住民、友人などの身近な人々のネットワークと重なっており、これらの人々以外からの動員はあまり見られない。その原因を、著者は台湾社会における 1)社会参加のジェンダー差と 2)集団主義から説明している。前者について、儒教文化の影響が強い台湾社会では、男性は政治経済などの公的領域への参加が活躍を行う一方、女性は家父長制のもとで政治経済への参加は制限され、その代わりに私的領域での活動に参加する。慈済会は、私的領域に参加する女性に働きかけており、そのため慈済会メンバーには女性が多いという。そして、集団主義の強い台湾においては私的領域では、家族・親戚がもっとも重要な布教対象となるため、慈済会メンバーは女性を中心とした身近なネットワークを通じて動員されるのである。慈済会の布教システムとして、1）慈済会に参加しても集団内に知人がいなければ、活動に参加しにくく、その人の援助行動も発展しない、2)「積功徳」という観念が援助行動を誘発・促進する上

である。3）私的領域ネットワークを通じての布教することで、メンバー間の信頼感が確保され、寄付と援助行動がスムーズに行われる。

第 6 章では社会運動論における「フレーム分析」を応用して慈済会メンバーの援助行動への参加プロセスを分析している。まず Snow と Benford によるフレーム分析の議論を踏まえ、慈済会からは「診断フレーム」「治療フレーム」「動機フレーム」という 3 つのフレームが提供される。具体的なプロセスとしては、まず、現代台湾が直面する様々な社会問題（価値観の崩壊、西洋化）の根源には、現代人の物質主義・功利主義があると認識し（診断フレーム）、儒教倫理と仏教的道徳の再認と強化がその解決方法であるとする（治療フレーム）。ただし、問題を診断し治療方法が分かったとしても、社会全体にその課題を解決しようとする動機がなければ人々は動員されないため、慈済会は「動機フレーム」を用いる。具体的には「問題の深刻さ」「問題の緊急性」「行動の有効性」「行動の適切性」に関する 4 つの「基本的動機語彙」を繰り返し強調する。そしてこうしたフレームに共鳴した慈済会メンバーは、「集団行動フレーム」を内在化し、適宜それを修正しながら、慈済会の援助行動に参加していくのである。以上のようなフレーミングのプロセス（慈済会側からのフレームの提供とメンバー側のフレームの受容）が、慈済会の刊行物と慈済会メンバーの語りの分析を通じて描き出される。

第 7 章では、Callero・Howard・Piliavin の相互作用説に基づき、メンバーの慈済会への参加過程を三つの段階に分けて分析している。このモデルから、慈済会メンバーの援助行動は長期間（9 ステップ）の社会相互作用によって発生することを示されている。しかも、特定の環境（ネットワーク、感情的連携など）は援助行動の実践・発展に不可欠である。参加過程において、メンバーは多くの障害を越えながら一層運動に結び付けられる。社会的連帯、社会的役割、社会的意義の構築過程といった様々な社会的相互作用が、援助行動の発生、持続、発展に対して大きな影響を与えている。

第 8 章では、Omoto と Snyder の動機尺度を用いて慈済会メンバーの援助行動参加の動機を説明している。慈済会メンバーの参加動機には「積功徳」・「福田」・「因果」などの、援助行動に促すような「文化レパートリー」が目立つ。集団主義の強い台湾社会では、慈済会メンバーの集団への帰属意識が強く、慈済会の提唱する利他主義がメンバーの価値観を大きく規定

している。慈済会メンバーが援助行動の動機を聞かれた際には、教団の提示するフレームである「利他性」を回答する傾向にある。

第 9 章では、慈済会の援助行動の制度化とルーティン化のジレンマが分析される。教団の大規模化に伴い慈済会は制度化も進んでいる。それは、たとえば、メンバーの活動業績に応じた数の蓮華のマークを会員証に記載する奨励制度に顕著である。Schwarz と Howard によれば、援助行動の一般的傾向として、奨励制度などの外在的動機付けを行えば確かにメンバーの活動参加は高まるものの、一方で、参加の自発性といった内発的動機付けが弱まり、活動自体がルーティン化してしまうという（「ブーメラン効果」）。だが、慈済会では、1）援助行動の自発性を強化させ、2）慈済会を家族のアナロジーで説明することによってメンバーの団体帰属意識を高め、3）援助行動における成功体験を語る場を設ける、ことによって「ブーメラン効果」を回避することに成功している。

結論では各章の知見を要約した上で、台湾社会における民間の活力について論じている。慈済会は、草の根の社会運動から制度化された台湾の民間団体（慈済会）にいたるまでの台湾社会の政治経済の発展を反映している。著者が最も関心をよせるのは、慈済会が私的領域から公的領域に介入している点であり、台湾民間の社会力の拡張とも考えられる。こうした「社会的活力」をどのように理解し生かしていくかという問題は、台湾研究者にとって重要な課題であるとする。

以上、紹介してきたように、本書の内容は 547 頁という頁数を超えてはるかに、膨大なものである。それを 1 つの書評としてまとめるのは非常に困難であるため、ここでは本書の優れた点について 2 点触れておきたい。

第 1 に宗教社会学以外の他領域の社会学（および社会心理学）の理論や方法論を積極的に取り入れながら、慈済会に肉迫していることである。たとえば、慈済会メンバーになるプロセスと援助行動への参加プロセスが論じた第 5 章と第 6 章では、それぞれ近年の社会運動論における資源動員論とフレーム分析を用いながら分析している。またメンバーの援助行動参加動機を取り上げた第 8 章では、利他的行動に関する社会心理学での理論を応用している。いずれも各章の問題設定に合致した理論が用いられており、宗教現象を社会学・社会心理学の理論を用いて分析することの面白さと重要性が伝わってくる。

第 2 にデータの豊富さと網羅性である。著者が質的データとして用いた資料は、メンバーやスタッフへのインタビューデータ、教団刊行物、著者自身の参与観察など幅広い。また第 5 章で動員構造を分析と第 8 章の動機の分析においては、質問紙調査に基づいた量的なデータを用いている。

ただし、本書には若干の問題点もある。第 1 に、確かに緻密なフィールドワークと理論的検討により慈済会を丹念に描いてはいるものの、使われている概念や理論が多く、事例と筆者の体験が混ざって書かれている箇所や議論が急転する部分も若干見られた。そのため、読みにくい箇所もあり、全体的な分析の焦点がやや散漫になっている印象も受けた。

第 2 に慈済会は証厳法師カリスマ的リーダーシップが強い宗教団体ということを著者は認識しているが、この点に関する議論がほとんど見られない。もちろん筆者が指摘するように、証厳法師に関する先行研究は既に行われてはいるが、証厳法師のカリスマ性を省略すると、慈済会メンバーの援助行動を全般的に解釈できなくなると思う。証厳法師のカリスマ性はどのように慈済会の援助行動を促進するのか、特に証厳法師のカリスマ性が文化的フレーミングとしてどのように機能しているのかについても言及されていれば良かったと思う。

第 3 に慈済会の代表性である。確かに台湾の宗教と援助行動において慈済会が極めて重要な団体であることは間違いない。しかし本書を読む限り、慈済会は、布教方法や組織戦略の点で、教勢拡大期の新宗教に近いように見える。その意味で、台湾における宗教と援助行動の事例として慈済会を取り上げる際、慈済会の代表性の問題についても言及が欲しいところである。たとえば、慈済会メンバーは台湾のどのような社会階層の人々から構成されているのか、慈済会メンバーのネットワークは、伝統仏教寺院でボランティア活動を行う際に機能するネットワークとどう異なるのかといった点についても、何らかの言及があれば、慈済会の特殊性がもう少し浮き彫りになったのではないかと思う。

もっともこれらのこの点が不足しているからといって本書の意義が損なわれるわけではない。本書が慈済会研究における大きな到達点であることは間違い。本書は良質なエスノグラフィーの見本となり得ている。リサーチクエスチョンを明確にした上で、適切な理論的枠組みを設定し、説得力のある事例を提示すること、そしてそこから有意義な議論を展開していく

ことは、研究の不可欠な条件ではあるものの、必ずしも容易なことではない。本書はその難事を乗り越えた貴重な研究成果である。また、第 2 章では、フィールドワークを行う際に筆者が抱えた悩みについても多くの紙幅を割いて説明している（調査の進展に伴う調査者役割の変化とその葛藤など）。フィールドワーカーにとって調査対象者（団体）との関係を調整することは大きな「悩み」の 1 つだが、こうした葛藤経験を読むことは「悩み」を解消するうえで極めて重要である。宗教団体を含めた組織のエスノグラフィーに取り込もうとする研究者にとって、本書は多くのことを教えてくれるのではないだろうか。研究能力の鍛錬という教育的な意味でも、貴重な一冊だと思われる。中国語の書籍ではあるが、冒頭でも述べたように、本書の原型となった英語の博士論文は著者のホームページで閲覧可能である。多くの方々に是非一読を勧めたい。

註

(1) URL は http://idv.sinica.edu.tw/jcting/（2013 年 1 月 31 日取得）。

参考文献

（日本語・英語文献、アルファベット順）

Hsiao,Hsin-Huang M.and David.Schak, 2005 “Socio-cultural Engagements of Taiwan's New Buddhist Groups” *China Perspectives* 59: 43-55.

金子昭 2005『驚異の仏教ボランティア――台湾の社会参画仏教「慈済会」――』白馬社。

Madsen,Richard,2007 *Democracy’s Darma: Religious Renaissance and Political Development in Taiwan*,Los Angeles,University of California Press.

三浦典子 2010「高齢化社会台湾における宗教団体の活動」三浦典子編『台湾の都市高齢化と社会意識（山口大学東アジア研究シリーズ１）』渓水社、95-112。

村島健司 2012「台湾における生の保障と宗教：慈済会による社会的支援を中心に」『関西学院大学社会学部紀要』114、213-226。

（中国語文献、ピンイン順）

丁仁傑 2004 『社会分化与宗教制度変遷：当代台湾新興宗教現象的社会学考察』台北、聯經出版社。

――――― 2009 『当代漢人民衆宗教研究：論述、認同与社会再生産』台北、聯經出版社。